

子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告<14> —平成28年度実施プログラム—

杉山章** 杉山喜美恵* 白山真澄** 大蔵真由美*
(東海学院大学短期大学部幼児教育学科*)
(東海学院大学人間関係学部子ども発達学科**)

要 約

平成28年度に実施した子育て支援プログラム「あそびの森」の実践報告をする。短大部と四大部で別々の取り組み方をした2年目である。参加者数の推移、取り組みの方法など、様々な変化があるものの、地域に開かれた大学、地域の保育者養成校としての責務などの一端を担っていることの象徴的な取組として継続していきたい。

キーワード： 子育て支援 保育実習 地域貢献

1 「あそびの森」プログラム：実践の蓄積と変遷

子育て支援「あそびの森」プログラムは開始以来14年の歴史を重ねてきたが、近年は変革の時を迎えている。ここでは、これまでの実践の蓄積を振り返りつつ現在の課題を検討することで、今後の展望を探る機会としたい。平成15年度に制定された次世代育成支援対策推進法(平成17年度から10年間の時限立法。平成37年まで延長)をうけ、「今日の教育ニーズに対応した教育改革プログラム」の実践プロジェクトとして、本学では、平成16年度に東海女子短期大学児童教育学科幼児教育専攻が主体となり、子育て支援プログラム「あそびの森」を立ち上げ(若杉ら,2006)、今日まで継続してきた。14年間の活動の軌跡を辿ると、当初の主たる理念は変わらないものの、社会的および学内的な状況の変化につれて、活動形態や運営形態が次第に変化している。短期大学紀要32号-42号を参照し、参加者数の推移をまとめた。(図1)この変遷を振り返ると、創生期(平成16~18年度)、隆盛期(平成19~24年度)、転換期(平成25年度~)の3つの時期に分けることができる。

<創生期>

平成16-18年度の活動記録をひも解くと、プログラムに適した環境空間の構成、間伐材の遊具導入、短大幼児教育学科の保育ゼミナールを主体とする学生と教員の活動体制確立、地域の子ども関連機関との連携構築などの創生期の意気込みと、想定以上の応募者に抽選制を考慮するほどの地域の反響等の熱気が記されている。平成16

年10月の第1回オープニングイベントを皮切りに月1回のペースで企画を進める体制がこの時期に確立した。

<隆盛期>

平成19-24年度の活動記録には、短大幼児教育学科の全教員が「あそびの森」の運営及び学生の指導に携わり、教員間のチームワークが円滑に機能して、学生の実践的な学びの機会として成果を挙げている様子が描かれている。四大子ども発達学科との連携もスタートし、ゼミの学生と教員の多様な専門性との相乗による多彩なプログラムが展開されている。また、短期大学部主催「出張あそびの森」も2年目からスタートした。学外保育施設でのペープサート劇公演などが軌道に乗り、「あそびの森」と「出張あそびの森」を合わせると、ピーク時には2,681人(平成24年度)の子どもと保護者に子育て支援プログラムを提供している。

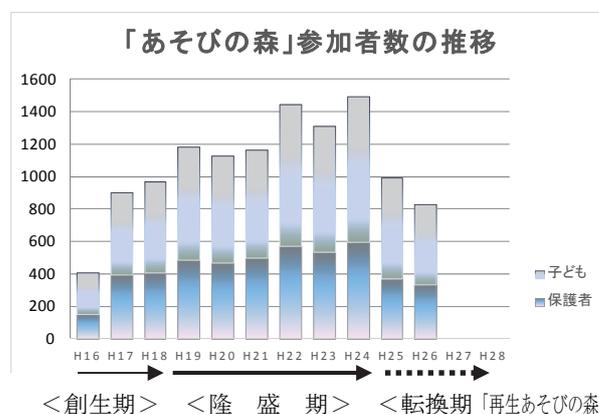


図1. 「あそびの森」参加者数の推移

(実践報告1-13より作成)

<転換期>

図1に示すように、平成25年度には「あそびの森」は大きな転換期を迎えた。そこには学内的な契機と学外的な契機がある。学内的契機として大きいのは次の点である。まず、「あそびの森」プログラムに関する学生の活動と専門科目授業との関連を精査することで、開催時期や開催数を精選した。これまでは全教員が携わる保育ゼミナールで、比較的自由に内容を構成してきたが、平成25年度からは教職実践演習の授業で扱うこととしたため、より教職専門性との関連が問われることとなった。また、平成26年度から四大人間関係学部子ども発達学科が全体計画を統括するという新しい形で再生して現在に至っている。

学外的契機としては、目下、全国の教職課程を擁する大学・短期大学が文部科学省による教職課程の再課程認定を機に、教職課程の整備と審査への対応を進めているが、「地域の子育て支援」と「学生育成」を理念として推進してきた本学のこのプロジェクトも例外ではない。中央教育審議会答申（平成18年度）「今後の教員養成・免許制度の在り方について」で教員養成・免許制度改革の方向性が示されて以降、教職課程で習得すべき資質能力の質的水準の向上が年々厳しく問われるようになっており、創立以来50年に渡り保育士・幼稚園教諭を輩出してきた本学にとっても、地域に立脚した養成校として、これからの教職課程の内容と指導体制をいかに整えていくかというのは最優先の大きな課題である。

このような背景により転換期を迎え模索を重ねている「あそびの森」プログラムは、質的に高次化した側面と、時間的、内容的制約に苦慮しながら実践を進めている側面を併せ持っているのが現状である。以下、平成28年度の実践を報告しつつ、活動の省察と今後の展望を記述することで、次年度へ引き継いでいきたい。

2 本年度の実践の位置づけ

(1) 短大部 教職実践演習

「教職実践演習」は、短期大学2年間の「学びの軌跡の集大成」として位置付けられ、他の授業科目の履修や様々な活動を通じて身に付けた資質能力が、幼児教育を担う教員として必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたものであることが求められている（中央教育審議会.2006）。また、授業の企画、立案、実施に当たっては、常に学校現場や教育委員会との緊密な連携・協力

に留意することが求められている。授業を構成する事項は、以下の4点である。

1. 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
2. 社会性や対人関係能力に関する事項
3. 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
4. 教科・保育内容等の指導力に関する事項

上)を押さえた上で、2年生2クラスの教職実践演習の授業において、以下のステップで「あそびの森」プログラムの「企画(plan)」→「準備・実践(do)」→「省察(reflection)」の指導を行った。まず、全体のテーマを「おはなしの世界であそぼう」と設定し、全員の学生がそれぞれ1冊の絵本を選び、おはなしを生かした活動計画を構想して指導案を書く。次に全員発表をした中から3~4の活動を選び、組み合わせを工夫して全体で大きなストーリーとなるよう再構成する。グループでそれぞれの活動の準備を整え、役割分担をしてプログラム全体の進行を完成させる。



図2 plan-do-reflection

(2) 四大部 保育実習指導 I

四大部は、前年度同様、保育実習指導 I の中で取り組みをした。その取り組み方などは、前年度の報告(年報)に詳細を記した。

短大部と四大部との大きな違いは、短大部は学生が在籍中に培った保育力の集大成を發揮する場として位置付けているのに対し、四大部では最初の保育実践の場という位置付けをしている点である。

本学四大学生の中には、高校の保育科を卒業している学生、中学校時の体験活動で保育の場を体験したのみの学生、保育の場はまったくの未体験の学生が混在しており、学生は入学時点で保育体験や子どもへの慣れに大きな差があるのが実態である。

そこで、保育実習指導Ⅰを通して、子どもやその保護者への対応に慣れていくこと、保育体験とそれを作り上げるグループワークを体験することを主にねらいとしている。

3 平成 28 年度の実践プログラム一覧

それぞれのクラス・グループが実践したプログラムは以下のとおりである。

プログラム 1

四大 (2 年生) グループ 1

季節をたのしもう「もうすぐ たなばた！」

学生数：7 名

プログラム 2

四大 (2 年生) グループ 2

季節をたのしもう「あっついなー！なつ！」

学生数：10 名

プログラム 3

短大 (2 年生) <1 組>

おはなしの世界であそぼう「みんなでんしゃ」

(ちっちゃい子向き)：学生数 30 名

プログラム 4

短大 (2 年生) <2 組>

おはなしの世界であそぼう「てのひらすいぞくかん」

(おっきい子向き)：学生数 30 名

4 短大部実践

(1) プログラム 3「みんなでんしゃ」の実践

実施日・会場

平成 28 年 12 月 3 日 (土) 保育実習室

AM 10:30~11:30

ねらい

参加者：絵本 (お話) からイメージを広げ、自分なりに表現することを楽しむ

学生：子育て支援のイベントの計画、実践を通して子育て支援に必要な能力について自分なりに考え、振り返りを行うことで自己の課題を明確にする

参加人数 子ども：10 名 保護者：9 名

参加スタッフ：学生 30 名 教員：4 名

内容

学生個人の今までの学びの集大成として、絵本を題材にした親子で楽しめる活動を考えて。学外実習等で子どもとのかかわりについては学んできているが、親子、保護者とのかかわりについては経験する機会が少ない。しかし、近年、保育者の「子育て支援」能力は保育者の専門性の一つとして求められている。その体験の場としてこの「あそびの森」は有意義な機会であると考えられる。

活動を考えるにあたり、授業の中で学生一人一人が絵本を一冊選定し、どのような活動を展開していくかについて話し合った。

25 冊の絵本が候補として出され、その中から全体の人数を考慮して 3 つの活動 (電車製作『みんなでんしゃ』、金魚つり『きんぎょがにげた』、クリスマス『ノントン、サンタクロースだよ!』『ねずみくんのクリスマス』¹⁾) に絞り、全体的な活動としての流れを持たせるためにストーリーを考え、役割分担を踏まえ指導計画を作成した。活動の流れは以下のとおりである。

①はじまりのあいさつ

②電車作り

・絵本の読み聞かせ『みんなでんしゃ』

・電車作りの説明及び製作

③クリスマス飾り作り及びさかなつり

・説明及び製作

④歌 (むすんでひらいて)

⑤おわりのあいさつ

基本的にコーナーあそびとし、「電車ごっこ」をつな

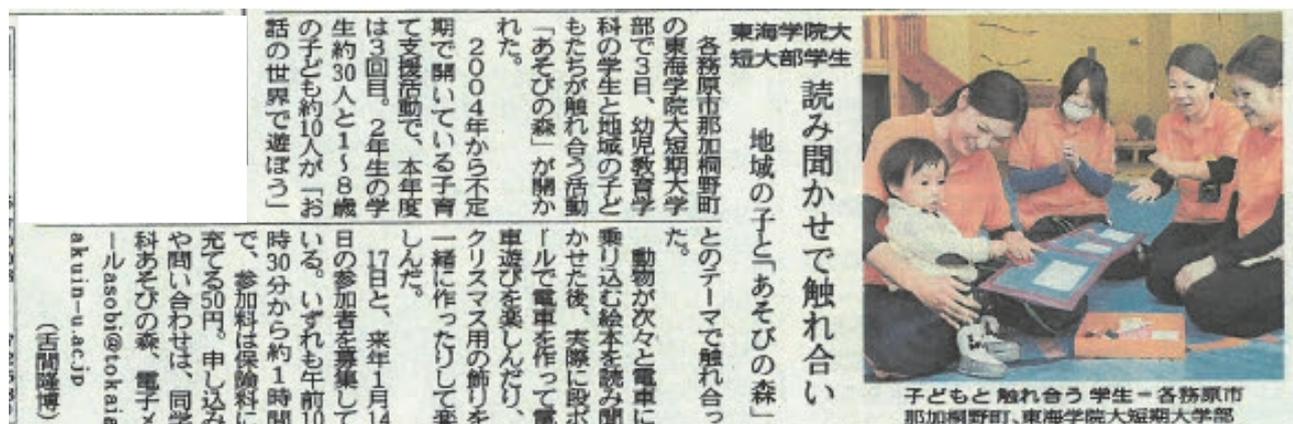


図 3 岐阜新聞 (2017/12/4)

ぎとして考えた。自分の作った電車に乗って「クリスマス駅」と「きんぎょ駅」に行き、それぞれきんぎょをつったり、クリスマスオーナメントを製作した。

総括・考察

当日は参加組数が少なかったため、十分な親子とのかわりができなかったことが一番の反省点である。学生たちは実習を経験したこともあり、子どもたちの前で話すこと、特に子どもたちにわかる言葉を選びながら表情豊かに話をすることができており、そこに学生たちの成長を感じられた。また、こうしたイベントでは安全性の担保が重要課題となる。それについても準備の段階から材料、製作過程などリスクを想定しながら自分たちで考え進めることができており、学びの集大成としての意義があったと感じた。広報については教員側の責任でもあるので以前のように多くの方に参加していただけるよう対策を講じる必要がある。

また、準備の時間が短く、学生たちが内容を練りあげ、計画を作成することが十分にできたとはいえない。スケジュールについても今後、考えていく必要がある。

参加者、学生たちはとてもよい表情で活動を行っており、新聞にもとりあげていただけた(図1)。この経験が卒業後、保育者としてのキャリア形成をしていく上での布石となるとよいと考える。

(2) プログラム4「てのひらすいぞくかん」の実践

実施日・会場

平成29年2月2日(木) 岐阜市立岐阜東幼稚園遊戯室
PM1:30~2:15

ねらい

参加者：絵本(お話)からイメージを広げ、自分なりに表現することを楽しむ

学生：子育て支援のイベントの計画、実践を通して子育て支援に必要な能力について自分なりに考え、振り返りをする事で自己の課題を明確にする

参加人数 子ども：25名

参加スタッフ：学生30名 教員：4名

内容

前述の実践と同様に、本学保育実習室での開催に向けて準備を進めていたが悪天候により中止となったため、別の日に近隣の長森東幼稚園の協力を得て「出張あそびの森」という形での実践を行った。学生が子育て支援のあり方を実践的に学ぶことができるよう、親子がともに

楽しめる活動を企画していたが、幼稚園での実践となったために直接的に保護者と関わることはできなかった。

本実践では候補の絵本のなかから『てのひらすいぞくかん』を選定した。紙に写された手のひらの形を活かした魚やくらげ、たこ、貝などの海の生き物が登場する絵本である。この絵本を参考にして、さらに様々な海の生き物の製作ができるよう考え、必要なパーツの準備などを行った。このあそびを中心に据えた指導計画を作成した。活動の流れは以下の通りである。

- ①はじまりのあいさつ、手遊び「さかながはねて」
- ②まねっこあそび『できるかな?—あたまからつまさきまで』
- ②絵本の読み聞かせ『てのひらすいぞくかん』
- ③手のひらで海の生き物を作ってみよう
- ④歌(むすんでひらいて)
- ⑤おわりのあいさつ

はじめに活動への期待をもつことができるよう魚にちなんだ手遊びを行い、音楽に合わせて動物の動きをまねるあそびを行った。次に、絵本『てのひらすいぞくかん』の読み聞かせを行った。小型の絵本なので複数冊用意し、子どもたちが近い距離で絵本の世界をじっくりと楽しむことができるよう配慮した。そこでのイメージを元にして製作を進めていった。画用紙に子どもの手のひらを形どりし、それをはさみで切り抜いたものにパーツを貼りつけたり、クレヨンで色をつけたりして海の生き物を製作した。製作した海の生き物は大学から幼稚園に持ち込んだ数枚の水色のパネルに貼り付けて見て楽しむことができるようにした。パネルは水族館をイメージして子どもたちの周囲を取り囲むように配置した。出来上がった生き物を貼りつけると、子どもたちは自然とパネルの周りに集まって、水族館を訪れたように順番に眺めたり、感想を言い合ったりして楽しんでいた。子どもたちが非常に気に入った様子であったので、活動終了後も園内にしばらく展示して頂くことにし、保護者なども見ることができるようにした。学生はなるべく子どもと1対1の関係を築けるよう声掛けを積極的に行い、最後には子どもと学生とが一緒に出来上がった物を楽しむ様子があった。

総括・考察

予想外の悪天候に見舞われたため、予定していた親子参加の実践ができなかった点が悔やまれる。ただ、事前

準備では親子で楽しめる活動内容を考え、準備を充分にしてきたので、それを活かした形で出張あそびの森の開催ができたことは幸いであった。また、悪天候に際して様々な面から参加者へのリスクを検討し、安全性を担保するための検証を行う必要があるという点について、改めてその重要性を教員、学生ともに確認することができた点には意義があった。

実践を通して振り返りを行い、自己の課題の明確化を図ることに關しては、十分な効果があった。参加する子どもにとって一度きりのイベントを企画し、実行することは実習とは異なる点からの気づきを得ることができる。学生は実習などを通して学んできた子どもと関わる力を活かすことができていた。一方で、スタッフとして学生が全員で協同して楽しい雰囲気作りをすることの難しさなどが反省として語られた。



図4 「あそびの森」の実践

5 短大部実践の省察と課題

スタート当初の「子育て親育ち・学生の心の育成」の理念は今も脈々と受け継がれているが、「あそびの森」の活動を教職課程専門科目の授業に組み込むことで、内容が充実した側面とともに新たな課題も浮かび上がった。まず、活動内容の成果として、全員が指導案を書き、その中から構想を練り上げていく過程を通して、どの学生も活動に深くコミットすることができた。TTによる授業であるため、教員の指導が細やかに行き届き、学生ならではの視点を生かして新鮮な活動を楽しく展開することができたという充実感は大きい。

その一方で、教職課程の必修授業に組み込むことで、結果的に、学生にとっては「あそびの森」プログラムに参加するチャンスが1度きりのものとなったのは残念な思いが否めない。ゼミ単位で企画をしていたころは、一人の学生が2年間で3～4回の活動経験を重ね、先輩と後輩のかかわりあいによって協同の学びのサイクルが成立し、実践知を高めることができた。自由な空気感のな

かで回数を重ね、伸びやかに成長することと、緻密な指導を受けて完成度の高い活動を一度の機会として経験することの教育効果の比較検証は難しいが、次なる活動の展開において、教師サイドが意図を明確にしつつ工夫を重ねていきたい事柄である。短大生にとっての2年間はタイトなスケジュールであるが、その中で伸びやかで自由度の高い学びの機会と緻密で高度な学びの機会の双方を提供できることが望まれる。

地域の幼児教育関連機関との連携、地域の親子への貢献、そして学生の実践的な学びのサイクルが有効に機能するようなプログラムとして、これまでの蓄積を生かしながら、今後のカリキュラムマネジメントを工夫していくことを重要な課題としてとらえている。

6 四大部実践

四大部で2回開催したプログラム内容を記載する。

幼稚園教育要領（平成29年3月）において、指導計画作成上の基本的事項に「具体的なねらい及び内容は、幼稚園生活における幼児の発達の過程を見通し、幼児の生活の連続性、季節の変化などを考慮して、幼児の興味や関心、発達の実情などに応じて設定すること」とある。あそびの森の実践は、初めて出会う子どもや保護者が対象となることがほとんどであるため、幼児の生活の連続性、幼児の興味や関心、発達の実情については把握が難しい。しかし「季節の変化」については、他の事項よりは、初めての実践としても学生でもイメージがもちやすく取り組みやすいと考えられる。幼稚園教育要領を意識して取り組めるよう実践を進めた。

四大部は保育実習指導Iでの実施ということで、2回とも「季節」を感じさせるテーマを学生に伝達した。また、基本的に展開を固定し学生が取り組みやすい状況を作った。

(1) プログラム1「もうすぐ たなばた！」の実践

実施日・会場

平成28年7月2日（土） 保育実習室

AM 10:30～11:30

ねらい

参加者：七夕の雰囲気を楽しむ。七夕を楽しみにする。

学生：子育て支援のイベントの計画、実践を通して保育について自己の課題を明確にする

参加人数 子ども：8名 保護者：6名

参加スタッフ：学生7名 教員：3名

内容

実施日が7月2日ということもあり、七夕をテーマにした。七夕そのものを扱ったり、七夕から発想し星や星空を扱ったりすることとなった。

オープニング

- ①自己紹介（学生）
- ②手遊び歌『はじまるよ』
- ③劇『七夕』
- ④コーナーの説明

コーナー遊び

- ①短冊作り
- ②星のステッキ作り
- ③天の川作り（貼り絵）
- ④星釣り（星を釣る遊び）
- ⑤星輪投げ

エンディング

- ①手遊び歌『アンパンマン』
- ②天の川完成披露
- ③短冊披露
- ④七夕の歌 ※作ったステッキを使って踊る
- ⑤さようならトンネル

総括・考察

入学当初から保育者を志向する目的意識の高い学生が数名おり、その学生たちが中心となって活動を作っていた。自分たちで時間を設定し、自発的な練習をしていた。

実践当日は、少ない参加人数であったが、その分、子ども一人ひとりとじっくり関わっている姿が見られた。参加者の方も、一つの遊びに繰り返し取り組んだり、作ったりするなど、短い時間ながらも遊びこもうとする姿が見られた。また、一人ひとりのスペースが広くとれ大きな動きをしてもぶつかる事なくのびのびと活動していた。安全のために教員を配置していたが、余裕をもって全体を把握することができ、学生の姿にも注目する余裕があった。

(2) プログラム2「あっついなー！なっ！」の実践

実施日・会場

平成28年7月16日（土） 保育実習室

AM 10:30～11:30

ねらい

参加者：夏の雰囲気を楽しむ。夏の到来を楽しみにする。

学生：子育て支援のイベントの計画、実践を通して保育について自己の課題を明確にする。

参加人数 子ども：15名 保護者：12名

参加スタッフ：学生10名 教員：3名

内容

実施日が7月中旬ということもあり、夏や夏休みをテーマに取り上げた。それらから、海、花火、妖怪、すいかわり、うちわ等を連想し、コーナー遊びやオープニング等につなげていった。

オープニング

- ①自己紹介
- ②ダンス「ようかい体操」
- ③コーナーの説明

コーナー遊び

- ①真夏の迷路（ダンボール迷路）
- ②うちわでパシヤリ（うちわを作って記念撮影）
- ③プレイフィッシングナウ（魚釣り遊び）
- ④玉入れで花火（花火の背景に玉を投げ入れる）
- ⑤けん玉（紙コップで作るけん玉）
- ⑥すいかわり（新聞紙を丸めて作ったスイカを割る）

エンディング

- ①読み聞かせ（おばけの本）
- ②各コーナーの振り返り
- ③「海」の歌
- ④さようならトンネル

総括・考察

実践としては、事前の全体練習の時間として1時間しか取ることができなかった。「夏」から学生の発想は広がったものの、形にしていくには教材等を作り慣れないため、試行錯誤の時間が取られたのであった。そのため、当日の動きや会話にぎこちなさが見られたものの、堂々と声を張って話すことができていた。また、初めて実践の場を経験する学生は、グループのメンバーに励まされながら取り組む様子が見られた。

アイデアを形にすることの難しさを感じたり、実習を迎える前の教材作りへの自己イメージを作ったりできたのではないと思う。

7 四大部実践の省察と考察

四大部では、保育実習指導Ⅰで取り組んだこともあり、本格的に実習が始まる前のプレ実習的な位置付けになる。教員としては、学生の成功体験となることを願いとして持っている。

参加学生の「実際に子どもと関わった経験」の実態は、この活動で子どもと関わることが初めての体験となる学生もいれば、1年生からボランティアなどに積極的に参加している学生、高校で実習経験がある学生など、様々であった。しかし、ボランティアとは違い職業としての保育者を意識して子どもと関わることは、初めての経験である。この点を実習指導でも、意識してきた。

実践後の学生の振り返りには、「子どもたちがとてもかわいかった」「親御さんと話すこともできてよかった」「親御さんと子どもの関係は様々だと感じた」「保育者になりたい気持ちが強くなった」「迷っていたけれど保育者の道に進みたい」など、「あそびの森」活動における体験を肯定的に捉えている学生がほとんどであった。一方で、「とても緊張した」「声が震えた」「もっと練習が必要」等自身の保育力と向き合うこととなった文章を見られた。そして、1名ではあるが「自分は向いていないと感じたから資格は必要ない」と、記述する学生がいた。

このような活動が、学生の就職とのミスマッチを解消するきっかけになった。ただし、こういった学生は、引き続き保育系の授業を履修していくことになるので、学業へのモチベーションが低下する等が懸念され、別の配慮が必要になると予想される。短期大学の例であるが坪井（2017）では、2年間に配置された幼保の実習を終えた後で取られたアンケートにおいて、施設保育士という選択をする学生が増えることが一因としながらも、保育所保育士を選択肢に入れる学生は、入学直後から実習を経て少しずつ減少していくとしている。本学の実態を把握するために、学生へ調査していく必要がある。

最後に、今回、授業時間のみではなく、学生たちが自主的に時間を作って取り組む姿がみられたことについて考察する。そのような時間については、教員としては活動しているという状況は把握していたものの、自主的な活動時間に出向いたり、同席する等はしたりはしなかった。とても、よいことであるととらえていた。しかし、その自主的な取組の中で、学生同士のトラブルが起きていたことが、当日直前に分かった。「リーダーとなった学生の集団をまとめる方法が自分の思いと違う」「改善点の指摘の仕方が強すぎる」「当日は欠席したい」などであった。そのような学生は2名であり、大多数の学生はグループ、チームで協力して活動を進めることができた。このような学生へ対する対応は、なかなか難しく、時間がかかり、個別的な対応が求められる。学生同士で

活動していくことに不慣れな学生に、任せていくことは、学生の実態を見極める必要があることが教訓となった。教員が、学生の様子を頻繁にかつさりげなくモニターし、学生が話をしやすい雰囲気をつくり、話しやすい態度をとる重要性を学んだ。

学生の活動を組織していくこと、見守っていくことは、時間や労力がかかるものの、学生が実習や将来の職業を具体的に想像していくには、非常に有効な機会になることは間違いないと思われる。実践を通して考えていくことが保育者の職能を開発していくことになるので、そのような姿勢を養成段階から育てていきたい。



図5 「あつついなー！なつ！」の実践

【文献】

- 中央教育審議会，2006「中央教育審議会答申（平成18年度）今後の教員養成・免許制度の在り方について」
 五味太郎，1982，「きんぎょがにげた」福音館書店。
 薫くみこ/かとうようこ，2009，「みんなでんしゃ」チャイルド本社。
 キヨノサチコ，1978，「ノンタン!サンタクロースだよ」（ノンタンあそぼうよ（7））偕成社。
 文部科学省，2017「幼稚園教育要領（平成29年3月）」7-8頁。
 なかえ よしを/上野 紀子，2003，「ねずみくんのクリスマス」（ねずみくんの絵本19）ポプラ社。
 坪井敏純，2017「キャリア形成に及ぼす保育実習体験と就職支援の課題」鹿児島女子短期大学紀要，第52号，97-102頁。
 若杉雅夫，篠田美里，長谷部和子，杉山喜美恵，瀬地山葉矢，2006「子育て支援プログラム『子育て親育ち・学生の心の育成』—あそびの森の試み—」東海女子短期大学紀要，第32号，53-60頁。